

【特集1】

新学期の授業アイデア

新学期を迎えました。生徒たちは期待に胸を膨らませていることでしょう。

その気持ちに応えるために、どのような授業をしたらよいでしょうか。

本特集では、新学期に役立つ授業のアイデアを、先生方にご紹介いただきます。

イラスト もとき理川



新学期に心がけたいこと

やまざき まさあき (北翔大学教授)

北海道生まれ。元千歳市立北斗中学校教諭。自身のブログ「美術と自然と人」で、授業実践や生徒作品などを紹介している。光村図書中学校『美術』教科書の編集委員。



30年以上、中学校で美術を教えてきましたが、
新学期はいつも
「新しい気持ちでやっていこう!」と思っていました。
私が新学期に心がけていたことや、
授業びらきの工夫などをご紹介します。

安心感をもたせる

美術に苦手意識をもつ生徒にその理由を尋ねると、たいてい「絵がうまくないから」と答えます。ですから、授業びらきでは、美術の学習の目標は絵を写實的に描くことではないと伝え、生徒たちに安心感をもたせたいですね。とはいえ、中学生になると描く力をつけたいと思っている生徒も多いので、「見て描く力」は努力で高められることを実感させたいものです。そこで、新学期の早い段階でスケッチの題材を設定して丁寧に指導するとよいでしょう。

また、表現はもちろん鑑賞も美術の大事な学習です。新学期に「対話による鑑賞」を行い、仲間と共に作品を鑑賞することのよさや、自分なりの見方や考え方をもちつことの大切さを伝えるとよいでしょう。

新学期に
行いたい授業は
P.6へ

授業のルールを共有する

学期初めの授業では、授業の中でのルールを生徒に伝えることも大切です。ルールというと堅苦しく思われがちですが、最低限のルールを守ることによって、楽しく豊かに学ぶことができます。教師が一方的にルールを提示するのではなく、ルールが必要な理由を丁寧に説明し、定着するまで繰り返し声かけをするようにしましょう。

授業のルールは
P.7へ

これからの学習への期待感を高める

中学生になると「なぜ美術を学ぶのだろう」と疑問をもつ生徒が出てきます。授業びらきでは、美術を学ぶ意味を考えさせたり、美術の奥深さやおもしろさを感じ取らせたりして、これからの学習に前向きな気持ちをもたせたいものです。本特集では、お二人の先生の実践を紹介しています。そちらをぜひご覧ください。

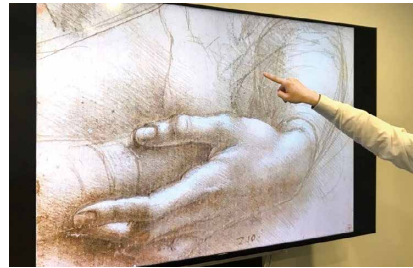
実践事例は
P.8~9へ

新学期に行いたい授業

＼ 山崎先生のポイント /
私が新学期によく行っていた
授業をご紹介します。

●「見て描く力」は努力で高められることを実感する授業

「見て描く力」は、美術表現のうえで大切な力の一つです。私は、レオナルド・ダ・ヴィンチやピカソの素描を観察させたうえでスケッチさせるようにしています。描き直しの跡がたくさん残った素描を観察することで、天才とよばれる画家たちも、試行錯誤しながら描いていたことを感じ取らせたいのです。そこから、失敗しても何度も描き直せばいいということや、努力によって描く力は高められることを実感させたいと考えています。



【授業の流れ(全2時間)】

①まず見て描く

教師の説明を聞き、幼い頃は知っているものを描くことが中心だったが、中学生になると物事を客観的に捉えられるようになり、「見て描く」おもしろさがわかることを知る。まず身近なものとして手を描いてみる。

②画家の素描から学ぶ

画家の素描を鑑賞し、描き直しの線や形を捉えるための補助線を見つける。そこから、画家も試行錯誤しながら描いていることを感じ取る。改めて自分のスケッチを鑑賞して、画家の素描との共通点を見つける。

③スケッチを楽しむ

画家の素描を参考に、身近なものをスケッチする。最初は、おおまかに形を捉えてから細かい部分を描き進める。次にマティスのスケッチなど、また違った描き方の作品を鑑賞する。短時間で何枚もスケッチし、さまざまな表現方法を楽しむ。

●美術鑑賞のおもしろさを知る「対話による鑑賞」の授業

新学期にこそ、クラスの仲間とともに一つの作品をじっくりと鑑賞する「対話による鑑賞」を行うことをおすすめします。作品の見方や感じ方は人それぞれですが、だからこそおもしろいと感じさせたいものです。そうすれば教室に受容的な雰囲気が生まれます。光村図書のウェブサイト「はじめよう、対話による鑑賞の授業」というコンテンツがありますので、授業の進め方はそちらをぜひご参照ください。

「はじめよう、
対話による鑑賞の授業」
はこちらから



「風神雷神図屏風」を鑑賞したときの様子。「美術準備室創刊号」には、このときの授業レポートが掲載されている。

山崎先生の
授業レポートはこちらから。



＼ 山崎先生のポイント /
授業をスムーズに進めるうえで
生徒と共有しておきたいルールを
をご紹介します。

授業のルール

●スケッチブックの使い方

スケッチブック(またはクロッキー帳)に美術での学びを集約させるとよいでしょう。生徒が気軽にスケッチブックを活用できるよう、新学期にさまざまな使い方を紹介しておくとうよいと思います。教科書1年P.9にはスケッチブックやノートの活用方法が詳しく掲載されています。

【使い方の例】

- ・作品の発想段階でアイデアスケッチをする。
- ・試し塗りをしたり、部分スケッチをしたり、「試す場」として使う。
- ・自分に必要な資料や気に入った写真などを貼る。
- ・ワークシートを貼ったり、作品を鑑賞したときの感想を書いたりするなど、ノートとして使う。

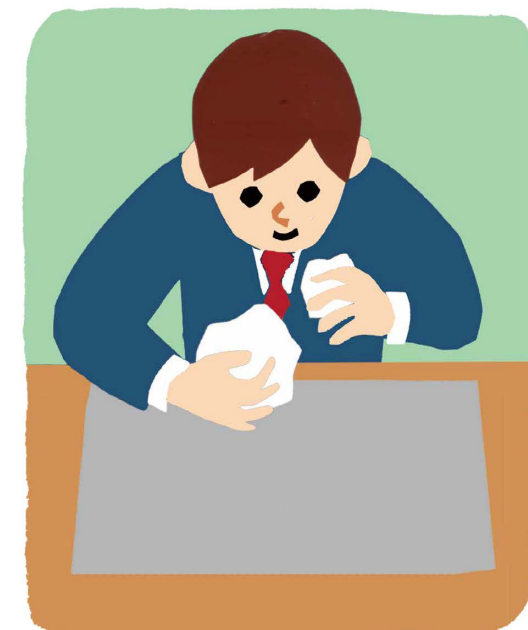


●道具や材料の使い方

美術室にある、道具や材料の保管場所や使い方を生徒に共有しましょう。そうすることで、生徒が思いついたときにすぐ道具や材料を活用できるようになり、表現の幅が広がります。

危険でない道具や材料であれば、詳しく説明する前に、まずは触れさせてみるというのも一つの方法です。例えば、面相筆を使ってどのくらい細い線を描けるか、樹脂粘土を使ってどんな形がつけられるかなど、遊びながら試させましょう。実際に触れて、体験を通して得た知識のほうが身につきます。表現に取り組む前に道具や素材に触れることで、その特性を生かして表現しやすくなりますね。

彫刻刀などの注意を要する道具は、使い方についての説明動画を教科書のQRコードから見ることもできるので、授業内で紹介するとよいでしょう。



●相互鑑賞のルール

生徒どうしの学び合いの機会を設けたいので、制作の途中で、生徒たちが互いの作品を鑑賞し合う「相互鑑賞」の時間を設定するようにしていました。その際に、必ず次のルールを伝えていました。

- ①友達の作品のよい点を見つけるようにする。もし課題があったら、それをそのまま伝えるのではなく、大事なことを一つに絞って伝える。
- ②友達からの意見や感想を取り入れるかどうかは自分自身で判断する。

①のルールを説明するときは、「意見を一つに絞ることも自分自身の勉強になるからね」と話しています。②では、「アドバイスを受けてもらえなかったからといって、落ちこむ必要はないよ」ということも伝えていきます。



実践事例

生徒たちが、これからの美術の学習に前向きな気持ちをもてるように、どのような授業をしたらよいのでしょうか。お二人の先生の実践をご紹介します。



事例1

「ゲルニカ」の鑑賞を通して、美術を学ぶ意味を考える

飯田成子

(埼玉県朝霞市立朝霞第五中学校教諭)

授業のねらい

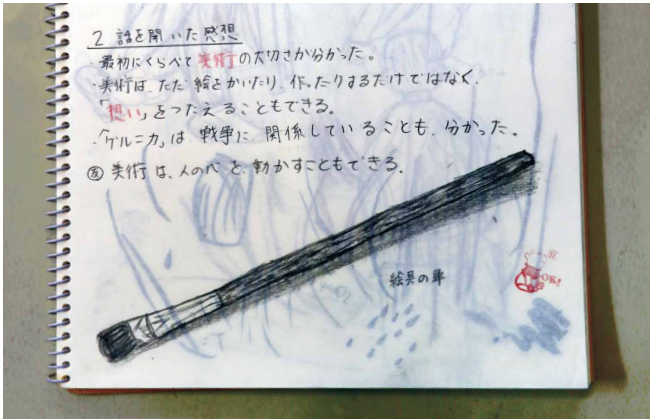
授業びらきでは、美術には言葉や時代を超えて思いを伝える力があるということを、生徒に実感させたい。そこで1年のオリエンテーションでは、「ゲルニカ」で対話による鑑賞を行い、ピカソが作品に込めた思いを感じ取らせる時間を設けている(「ゲルニカ」は2・3年の教科書に掲載されているので、2・3年のオリエンテーションでも扱ってもよいだろう)。この作品をじっくり鑑賞することで、美術の奥深さを感じ取らせたい。

「オリエンテーション」(2時間) 準備するもの:スケッチブック

時	学習活動
1	なぜ美術を学ぶのか考える ・教師が用意したスライドを見た後、美術は何のために学ぶのか考えて、自分の意見をノートにまとめ、発表する。 ・美術を学ぶと、感じたことを表現したり、鑑賞して相手の気持ちを考えたりできるようになることを知る。 「ゲルニカ」を鑑賞する ・「ゲルニカ」を鑑賞して、そこに描かれているものは何か、作品からどんなイメージが湧くかなどについて、クラス全体で話し合う。 ・「ゲルニカ」が描かれた背景について学び、ピカソが伝えたかったものは何か考え、発表する。 ・美術には、時代や言葉を超えて、人に訴える力があることを知る。
2	これからの学習について考える ・教師の説明を聞き、3年間の美術の目標「自分らしい表現をしよう 感じる心を育てよう」を知る。 ・美術室の中を自由に歩いて回り、どこにどんな道具や材料があるか知る。 ・美術室にある道具の中で気になるものを一つ選び、短時間でスケッチする。



生徒の緊張をほぐすため、「どんな意見でも間違いではないよ」と声をかける飯田先生。生徒たちは徐々に「悲しい感じがする」「絶望しているようだ」など、作品の主題に迫る発言をする。



この授業で生徒が取ったメモ。「美術は何のために学ぶのか」という問いについてじっくり最初の授業で考えることが、これからの学習へのやる気につながる。

事例2

新学期は「身の回りの美しいもの」に気づくところからスタート!

高見 藍

(さいたま市立大宮国際中等教育学校教諭)

授業のねらい

身近なところにある美しいものを、自分なりの視点で撮影する題材である。この授業で、人によって美しいと感じるものは違うことや、自らの「美しいと感じる気持ち」に気づかせたい。生徒は日常的にSNSに親しんでいるので、Instagram風に写真をまとめる活動も行った。絵を描くのが苦手な生徒も、写真であれば気軽に取り組むことができる。教科書1年P.2～4の「うつくしい!」のページを参照してもよいだろう。

「美しいものを探そう」(3時間) 準備するもの:デジタル端末、ワークシート

時	学習活動
1	美しいものとは何か考える ・美しいものとは何か考えて、クラス全体で話し合う。 ・教師が用意した複数の写真の中から心ひかれるものを選ぶ。どこが美しいと感じたか、形や色彩、質感などに着目して付箋に書き出して、同じ写真を選んだ生徒と意見を交流する。
授業外	美しいと感じる写真を撮影する ・日常の中で美しいと感じたものや風景を撮影する。
2	自分で撮影した写真を分析する ・自分で撮影した写真を鑑賞し、どこが美しいと感じたのか、形や色彩、質感などに着目し、そこから感じ取れるイメージをワークシートにまとめる。 ・グループに分かれてお互いの写真を鑑賞し、そのよさを話し合う。
3	選んだ写真に合った「#(ハッシュタグ)」を考える ・グループに分かれ、全クラスの生徒が撮ってきた写真の中から4、5枚程度、共通点がある写真を選ぶ。 ・Instagramのようにハッシュタグを考える。 ・選んだ写真の形や色彩、イメージなどから共通点を見つけ、短い言葉であらわす。



全クラスの生徒が撮ってきた写真の中から、気になる写真を選んでいる様子。「身近な風景も改めて見るときれい」「同じ写真を見ても人によって感じ方が違っておもしろい」といった意見が出た。



グループでハッシュタグを考え、ワークシートにまとめた。

わくわくする!

美術室づくり

新学期、気持ちも新たに美術室を見直してみませんか。
ここではお二人の先生の「美術室づくり」の工夫をご紹介します。

美術室をもっとご覧になりたい方はこちらから。



CASE 1



田中真二郎

(秋田県大仙市立西仙北中学校教諭)

美術室は、「ラボ(実験室)」にしたいと思っています。
ここで発想や構想を広げ、外に発信していくような場にしたい。
だから、生徒たちが自発的に「こんな表現をしてみたい」
「この道具を使ってみたい」と思えるような工夫をしています。



① 入り口の棚を
ミニ展示スペースに

美術室の入り口にある棚は生徒の目に留まりやすいため、生徒作品や展覧会の図録など「今、見てほしい」資料を置くようにしている。



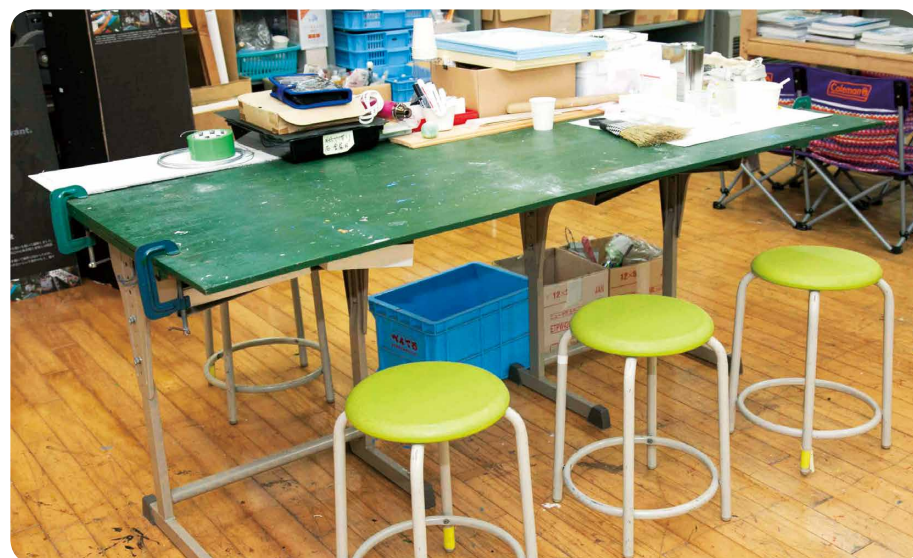
② 天井には
スチールシェルフを

「フィンランドの学校を訪れたとき、こういう吊り棚を見かけていいなと思い、まねしました」。生徒作品などを飾ることが多い。



③ 掲示物は
授業の内容に合わせて

授業の内容によって掲示物を変える。このときは「15歳の存在証明」という題材を扱っていたので、ゴッホの自画像の変遷を掲示。



④ 「実験コーナー」と
「図書コーナー」

教室の後方には、自分の机ではできないことを試すための「実験コーナー」(左)があり、大きな作業台にさまざまな道具が置かれている。美術関連の書籍や雑誌をゆっくり閲覧することができる「図書コーナー」(右)も。

CASE 2

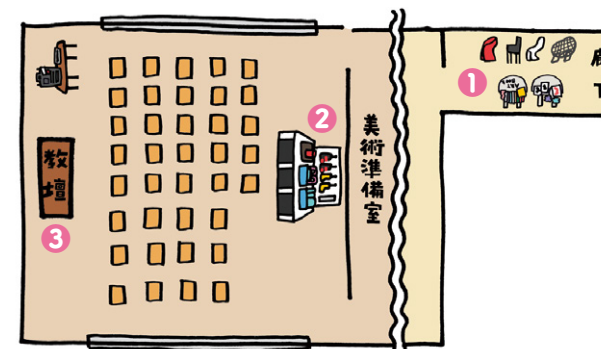


小西悟士

(埼玉大学教育学部附属中学校教諭)

「遊び」の場として /

美術室では「遊び」を大切にしたいと思っています。
今の子どもたちはちゃんと遊べなくなっている。
ただ楽しく騒ぐことも「遊び」ですが、余白のことを「遊び」といったり、
結果を恐れずに試してみることも「遊び」といったりします。
生徒も遊び、教える側も遊ぶ。
一緒に遊べる「たまり場」のような場所にしたいです。



左右の窓から光が差し込む明るい美術室。机は授業の内容によって適宜配置を変える。隣に広い美術準備室があり、そこには生徒作品を展示したり、普段使わない道具を置いたりしている。廊下から美術室へのアプローチも印象的だ。



① 美術室へ続く廊下はギャラリースペース

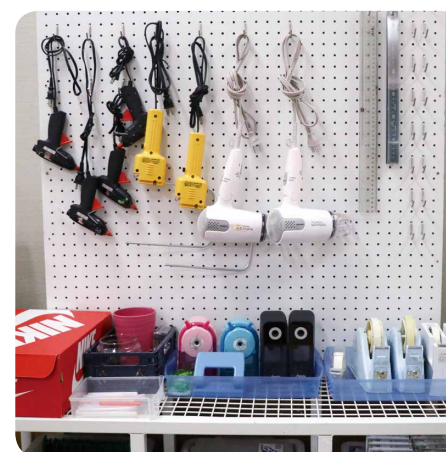
美術室へ続く廊下の壁には展覧会のポスターが貼られ、その前に先生がコレクションしているデザインアームチェアがずらりと並ぶ。「ここは出入り自由のたまり場のような場所にしたいんです」。椅子の向かいにあるテーブルには、美術関連の書籍が置かれ、気軽に読めるようになっている。



先生がセレクトした美術関連の書籍。



生徒は、バントンチェアなどの名作椅子に気軽に座ってつづぐことができる。



② 道具は使いやすく

教室の後ろには、さまざまな道具がきれいに整理して収納されている。「使いたいと思った道具を、自分ですぐに取り出せるようにしておきたい。そこにストレスを感じさせたくない」と小西先生。

③ 制作中にはBGMを

全体に向かって話すときはマイクを使う。左はマイク用のスピーカー。右はパソコンにつないでいるスピーカー。授業中でも制作に集中してもらいたいときには音楽を流す。ふと耳に入る音からも発想のきっかけが生まれるという。

